

## NICU に入院している児の母親への母乳育児支援 －NICU における搾乳ケアの実状と看護者の認識－

村松美恵<sup>\*,1)</sup>、神崎江利子<sup>1)</sup>、黒野智子<sup>1)</sup>、室加千佳<sup>1)</sup>、藤本栄子<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>聖隷クリストファー大学

【目的】治療を必要とするハイリスク新生児は、新生児集中治療室(以下、NICU とする)に収容され、出産後早期から母親と児は物理的に分離した状態となり、直接授乳が困難になる。母親は、直接授乳ができるようになるまで母乳分泌を維持するために乳房の自己管理を求められる。そこで本研究は、NICU に入院している児の母親への母乳育児支援の一環として、NICU における搾乳ケアの実状と看護者の認識を明らかにすることを目的とする。なお、ここでいう搾乳ケアは搾乳に伴う指導と乳房ケアとする。

【方法】1) 研究対象：A 総合病院周産期センターの NICU・GCU に 1 年以上在職し、研究協力の得られた助産師・看護師。調査期間は 2012 年 1 月から現在に至る。2) データ収集方法と分析方法：NICU 入院児の母親に実施している搾乳ケアについて、看護者の思いや考え、ケアの実状について半構成的面接を行い、承諾を得て録音し逐語録を作成した。データは共同研究者複数で読み込み、搾乳ケアの実状と看護者の認識に関して類似した内容に分類した。3) 倫理配慮：研究対象者には口頭および文書で研究の趣旨と方法等を説明し承諾を得た。また、本研究は聖隷クリストファー大学倫理審査委員会の承認（認証番号 11022）、調査対象施設の臨床研究審査委員会の承認を得て実施した。

【結果・考察】本研究は、調査期間を延長してデータ収集・分析を行っている。今回は、4 事例の分析結果を報告する。1) 対象の属性：看護師 3 名、助産師 1 名、臨床経験年数は平均 6.3 年であった。いずれも他病棟での勤務経験はなかった。2) 搾乳ケアの実状：直接授乳を目標に、“母親の体調への配慮”をしながら、“母乳育児の動機づけ”を行っていた。母親が産科病棟入院中の搾乳ケアは産科病棟のスタッフに委ねていたが、退院後は“母親の生活を意識”しながら搾乳状況を把握し、“経済的負担を考え”、“泌乳維持のための方法”を母親と共に検討していた。また、母乳育児支援を担っている“専門ナースにつなぐ”ことをしていた。“母親が一生懸命搾った母乳を無駄しない”ようにし、“母親の気持ちを配慮”しながら、“搾乳へのモチベーション下がらないように”、“母親が搾乳で辛くならないように”意識しながら関わっていた。3) 看護者の認識：搾乳に取り組む母親に対する認識と搾乳ケアに対する看護者の認識に大別された。搾乳に取り組む母親に対する認識は、母親自身に対する認識、搾乳行為に対する認識、母乳に対する認識に分けられた。看護者は搾乳をする母親を、“体調がすぐれない”、“搾乳で辛い思いをしている”、“できることは母乳しかないと思っている”、子どもに対して“何もできないと思っている”と捉えていた。そして搾乳行為を“母親ができること”、“すごく孤独”と捉え、母乳を“子どもにとって価値のあるもの”、“母親と子どもをつなぐツール”としていた。搾乳ケアに対する看護者の認識は、搾乳ケアの不確かさ、病棟内での搾乳ケアへのウェイトのおき方が違う、ジレンマを抱えながらケアを行う等に分けられた。看護者は、“乳房状態の判断に対する不安・自信のなさ”があり、“乳房トラブルには弱い”と感じ、“困った時は専門ナースを頼る”ようにしていた。一方で“専門ナースに頼りすぎている”と感じており、“搾乳ケア向上の意欲はあるが時間がとれないというジレンマ”を抱えながらも“気合いを入れればできる”と搾乳ケアに取り組んでいた。

\*本研究は第 27 回日本助産学会学術集会に発表予定である。